スポーツにおける「勝利／敗北」とは何か
――川谷茂樹『スポーツ倫理学講義』（ナカニシヤ出版、2005 年）を読む

中島水緒（2018/05）

［本書の狙い］
スポーツをスポーツたらしめている論理を哲学的／倫理学的に考察。「スポーツとは何か」を哲学的に問う。
誰しもがスポーツに抱いている両価的（アンビヴァレンツ）な感覚を出発点として思弁を展開。
→多くの人々がスポーツに対して何らかの感情を抱いている。まったく無関心でない限りはスポーツを見たり行なったりする。同時にスポーツを取り巻く言説に違和感をおぼえる人も多いのでは。違和感こそが思索の出発点。

［第 1 講義］スポーツマンシップについて
「スポーツマンシップ」とは＝競技者の「善し悪し」を判定する規準。倫理的な問題が深く関わる。
スポーツマンシップに反している＝「卑怯」とされる事例
・星稜高校時代の松井秀喜が明徳義塾高校に五打席連続敬遠された事件。
・柔道の山下泰裕とラシュワンによる決定戦。負傷している相手の右足（弱点）を攻めるかどうか。
→相手の弱点を攻めるのは「勝利」のために当然？
「対面型スポーツにおいて相手の弱点を攻めることは、非難されるどころか、競技者として当たり前の行為です。それではなぜ弱点を攻めるのでしょうか。それは勝利を得るためです。弱点を攻めることは勝利の追求の一環です。相手の弱点を攻めることができない人は、勝利を得るためにベストを尽くしていないのです。」「弱点を攻めるという原則は、こうして勝利の追求という大原則の下に包摂されます。」（24 頁）
→著者によれば、勝利の追求こそがもっとも基本的なスポーツマンシップ。

スポーツの内在的原理／外在的原理＝スポーツ内部におけるスポーツ独自の価値観／スポーツ外の日常倫理
勝利はスポーツの世界においてはリアルで自然的な価値。スポーツマンシップは克服すべき「課題」でなく苦もなく達成されている「所与」。
→スポーツは非日常的営み。そのため、日常の道徳とスポーツ内部の道徳が反転することがある。
「スポーツは現実世界から空間的時間的に区切られ独自のルールに基づいて行われる非日常的営みです。だからこそ、日常的道徳には認められない行為が、逆にスポーツの内部では称賛されます。しかし、一方ではスポーツもやはり現実世界の一部であり、それと接点を持っています。競技者も競技が終われば、常識道徳を基本原理としている日常生活に戻ります。」
【＋α】スポーツに類似した非日常の営みは他にあるか。遊び？アート？　（参考文献：カイヨワ『遊びと人間』）

［第 2 講義］卓越性理論と「勝利／敗北」
卓越性はスポーツの内側から勝利至上主義を克服しうる原理？
→チームスポーツはチーム全体で相手より点を取ることが大事。個人の卓越性追求より、チーム全体の総合力が重んじられる。また、相手の卓越性が発揮されるのを抑えることも必要。
→結果的に勝ったほうが「卓越していた」＝「強い」ということになる。
「そもそもスポーツの試合とは、どちらの身体能力が優れているか、どちらが卓越しているかを決めるために行われます。(…) 勝った方が卓越性が高く、負けたほうが低いということになります。それ以外の解釈はありえません」「「強さ」が試合の勝敗によって決定されるという思想こそが、スポーツの根本的な思想です。」（54 頁）
敗北には敗北の価値がある？
→はじめから敗北を目指すということには絶対ならない。それでははじめから競技に参加してないのと同じ。競技そのものは勝利ではなく勝敗の決定という価値を目的として持っている。

「競技そのものによって達成されるべき価値と、競技者によってその競技の内部で追求されるべき価値は異なるのです。前者は勝敗の決着であり、そのかぎりで勝利と敗北は価値において同等ですが、後者はあくまでも勝利です。そしてさらに大事なことは、前者の価値を達成するためには、競技者は勝利以外の価値を追求すべきではないということです。後者の価値（勝利）の追求は、前者の価値の達成の不可欠な条件なのです。」「強さの比較という競技そのものも目的が、競技者に対して、勝利の追求を目的として課するということもできます。したがって勝利の追求とは、競技という営みそのものがその参加者に対して要請する第一原理だったのです。」
→勝利の追求は競技という営みが参加者に要請する第一原理。
【＋α】「(…)「勝利（Victory)」とは、ある一面では特定の社会や思想が抱く正しさの終着点であり、別の側面では敗者を生み、その結果として弱者や貧困をはじめとするさまざまな問題を切り捨ててしまう状況にもつながる。」（参考文献：『Va+　勝利と芸術生産』）

［第 3 講義］勝利の追求とルールの遵守／ドーピング問題をめぐって
構成的ルールと派生的ルール。
→違反すると競技が成り立たなくなるのが構成的ルール。勝利の追求こそが最高原則で、その下位にあるのがルール遵守。競技者は負けない範囲でルールを守ればよい。
では、勝利追求のためにドーピングをしてもよいのか。ドーピングはなぜルールで禁止されているのか。
個人の身体を破壊する、イコールコンディションを破壊するといったアンチ・ドーピング論。
→そもそもスポーツを極めること時代が身体に不要な負荷をかけている。イコールコンディションさえ保たれていればドーピングも可なのかという疑問。ドーピングの思想を極限にまで突き詰めるとサイボーグ化に行き着く。ドーピングの思想はあまりに純粋にスポーツ的すぎる。
【＋α】ドーピングをめぐる様々な問題点。科学技術の進歩に人間の倫理観が追い付かない。安易な規制はフェアプレイやスポーツマンシップといった道徳機能を衰えさせる。自己責任ならドーピング OK？
未来の私を他者と見なす「世代間倫理」の考えでいくと、ドーピングは他者危害に相当するから NG？等々
（参考文献：近藤良享編著『スポーツ倫理の探求』）

［第 4 講義］スポーツの本質的な暴力性
プロボクシングを事例に考察。暴力性が際立つボクシングは存続すべきか廃止すべきか。
→相手の身体に深刻な損傷を与える。勝敗のコントラストが生死のコントラストと重なる。KO 勝ちは「死」という究極の害悪を連想させる。
「勝利を獲得することは同時に、相手に敗北という害悪を与えることです。」（123 頁）
→勝利だけが唯一のプラスの価値。スポーツは本質的に暴力的で、日常生活では許されないことがスポーツでは許される。スポーツの論理 vs 日常倫理。
【＋α】スポーツの元々の原動力はエゴイズム？　個人同士が対決する「自然状態」を倫理規範が抑制する。（参考文献：前掲書『スポーツ倫理の探求』）

［議論ポイントのまとめ］
・スポーツマンシップとは何か？　正々堂々としたプレイと卑怯なプレイについて。フェアプレイとは何か。
・スポーツの目的とは何か。卓越性の追求か。敗北にも価値があるとしたら具体的にどのようなものか。
・「勝利／敗北」という二元的価値体系とは別のオルタナティブな価値体系を模索することは可能か。
・ドーピングは是か非か。その理由が挙げられるとしたらどんなものがあるか。
・スポーツが前提とする本質的な暴力性について。スポーツは野蛮さを表象する？　日常倫理とどう折り合いをつければよいのか。スポーツに反道徳性があるとしたら、それをどのように捉えればよいのか。